

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2013年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科		比較組織ネットワーク学専攻	
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	21世紀社会デザイン研究科 比較組織ネットワーク学専攻 2年次		杉原 学 印	
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名	
	21世紀社会デザイン研究科 教授		内山 節 印	
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同	名
<b>研究課題名</b>	近代日本における時間意識の変化とその影響に関する研究			
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	21世紀社会デザイン研究科 比較組織ネットワーク学 2年次		杉原 学	
<b>研究期間</b>	2013 年度			
<b>研究経費</b>	(支出金額) 200千円		/ (採択金額) 200千円	

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、現代における人間存在の不安定化、自己肯定感の低下、あるいは存在の自己諒解の喪失の原因を、より哲学的な考察に求め、「疎外論」及び「時間論」の視点から、「追いつめられていく人間」の構造をとらえることを目的とする。ここで用いる方法論は、人間と時間との関係の考察である。「時間のあり方の変容が人間にどのようなストレスを与え、またコミュニティの創造を妨げているのか」について、時間意識の変容と人間疎外との関係などから考察する。特に今回の研究では、市民社会の構造及び疎外論と密接な関係を持つ「時間の私的所有」という概念を分析視点に用い、人々の時間意識の変容をより詳細にひも解いていく。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 時間 ] [ 疎外 ] [ 私的所有 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**【人間の時間的つながりを生む「時間様相の共時性」の提示】**

人間は本質的に「関係存在」である。日本の伝統的な共同体は関係の網として形成され、人間の「存在の自己諒解」を支えてきた。それは空間的な「横のつながり」と、時間的な「縦のつながり」の両方を含んだ「時空」として存在していた。しかし、近代以降の共同体の解体により、人間の存在が不安定化しているいま、つながりの再構築がさまざまな形で求められている。そこで、今回は時間的な「縦のつながり」について論じ、その再構築について模索する中で、「時間様相の共時性」という概念を提示した。これは「時間の私的所有」の対概念である。たとえば江戸時代においては、生産と消費のサイクルが極めて近い範囲内で回っていたため、各プロセスは相互に認識可能な圏域にあった。その意味で「過去」「現在」「未来」は同じ空間で同時に展開していた。筆者はこのような事態を「時間様相の共時性」と呼び、これを「縦のつながり」を生み出す契機であると考えた。そして家族関係などにおいても見出されるこの構造について、「道元の時間論」「量子論」「分人主義」などの概念を用いながら考察した。江戸時代には多層的に存在した「縦のつながり」が、関係存在としての人間を支える基盤であるならば、われわれはなお伝統的な社会から多くを学ばなければならないことが如実に示されることとなった。この成果を論文として執筆し、日本時間学会に投稿したが、残念ながら査読においては不採用と判断された。問題意識には多大な評価を得られたが、様々な学問領域から多様な理論を援用したことにより、理論構築の説得性に不足があるとの指摘があった。これについては今後の課題としたい。

**【前近代的私的所有観の分析】**

今回の研究において用いる「時間の私的所有」とは、マルクスが『経済学・哲学草稿』の中で論じた「私的所有」の概念を念頭に置いており、これを時間論に応用したものである。ただ、日本のように私的所有権が確立した社会で生きるわれわれが「私的所有」の概念について論じるためには、まずそれを相対化する努力が必要である。これによって、近代的な私的所有の意味もより明瞭に認識されるであろう。そこで、近代的な社会と対極的に見える、私的所有の概念が支配的でない社会の存在様式を確認した。事例として取り上げたアフリカ伝統社会においては、所有権を社会的に制限する力が働いていることがわかった。このことは、近代社会が私的所有権を絶対的なものとして確立してきたのとは対極的である。これを単なる文明の未発展段階としてとらえることの不当性は、レヴィ=ストロースの諸研究などによってすでに指摘されてきた。彼らが私的所有権をあいまいにする手法として特徴的なのは、その社会において最も価値があるとみなされるものの所有権を、何らかの形で無力化し制限するということである。狩猟採集民の社会ではその対象は肉であり、ガブラ(遊牧民)の社会では家畜であり、焼畑農耕民の社会では農地やそこの収穫などであった。ここに近代社会を併置してみれば、私的所有権の無力化の対象となるのは、言うまでもなく貨幣となろう。このように見てみると、アフリカ伝統社会と近代社会は断絶したものではなく、同じ課題を共有した社会として位置づけ直すことができる。こうしたことをふまえた上で、近代的私的所有の概念を捉え、「時間の私的所有」の概念の考察を深めていった。

**【人間の個人化と未来への不安の関係の考察】**

明治以降の近代化とともに、かつて人々が生きた「共有された時間」は「個人の時間」へと置き換えられていった。このことは、人々の時間意識を「未来への関心」へと導いた。現代において、その影響は「未来への不安」として表れている。そこで、「人間の個人化」と「未来への不安」の関係性から、「現在を生きられなくなった人間」の問題を浮き彫りにすることを目指した。内閣府の調査によると、およそ70%もの日本人が悩みや不安を抱えて生活しているという。このことは、コミュニティを失った個人が、自己責任において生きて行くことのストレスを表している。このストレスが、未来への不安を増幅させている。こうした傾向は若者の間にも顕著に表れており、自殺の増加にも関係していると考えられる。都市の若者を対象とした調査によると、彼らの多くが将来への不安を抱えているという。そのことが、現在を単なる「貨幣の獲得の手段」に貶めているという現実がある。ここに「疎外」の構造が存在している。もちろんこの構造は若者に限ったものではないことは言うまでもない。これらの論考から、「未来による現在の支配」から抜け出すための方法と、その可能性を模索した。この成果を論文として執筆し、日本時間学会に投稿し、「人間の個人化と未来への不安」というタイトルで掲載に至った。

研究成果の概要 つづき

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**① 雑誌論文**

杉原学、「人間の個人化と未来への不安」、『時間学研究』、第6巻、日本時間学会、2013年、pp.61-71

**① 雑誌論文**

杉原学、「『時間の私的所有』とは何か」、『Social Design Review』、Vol.5、社会デザイン学会学会、2013年、pp.143-151